

仙台スポーツリレートーク・レポート

主催 市民スポーツボランティア SV2004

私たちはスポーツボランティアとして幅広いスポーツをサポートしています。そのスポーツに関わるキーとなる方に、現在のスポーツ事情や将来への展望に関して話しを聞くことができれば、私たちの活動はもっと広がり豊かになると考え、ボランティアの栄養補給と夢の実現の場として企画したものが「仙台スポーツリレートーク」です。

第六回 仙台・宮城のスポーツ 「大学からみたこれからの可能性」

スピーカー 仙台大学スポーツ情報マスメディア研究所 岩瀬 裕子 さん

日時 2010年11月25日(木) 19時~21時

会場 仙台市市民活動サポートセンター 研修室2

参加者 ボランティア関連 14名



私は「仙台大学情報マスメディア研究所」の研究員をしております「岩瀬裕子」と申します。みなさんは「スポーツ情報マスメディア研究所」と聞いて、どんなことをしていると想像されますか。一言でいえば「スポーツに関する情報を集め、必要な人・ところに渡す」仕事です。他には、全国11自治体で行われている文部科学省が推奨する「タレント発掘・育成事業」のなかで「スポーツ教育プログラム」というものを開発・実施しています。これはいわゆる芸能に関するタレントではなく、スポーツに関するタレント(能力)を扱うもので、子供たちの中からスポーツで才能のある人を見つけ育てる取り組みです。東北でも岩手・山形・秋田で行われておりますが、残念ながら宮城では実施されていません。

私は、この「スポーツ教育プログラム」の中で「伝えるを学ぶ」というプログラムを担当しています。トップアスリートは単に競技でいい成績を残すだけではなく、「スポーツ外交官」という役目を担っていると私は考えています。そのためには伝えることを学ぶことも大切になってきます。私自身、以前ミヤギテレビでスポーツアナウンサーをしておりましたが、海外への関心が強く、10年ほど勤めた会社を退職し3年間スペインに留学していました。ボランティアとの関わりという点では、そのスペイン留学中に体験した男子バスケットボールヨーロッパ選手権でのボランティアと、帰国してから始めたスペシャルオリンピックスのボランティアということになります。ですので、ボランティアに関しては皆さん

の方がずっと先輩でいらっしゃると思いますので、今日は、皆さんからもいろいろ教えて頂いて帰れたらと思っています。どうぞ、よろしくお願い致します。

一緒に話し考えるやり取り

ここで、参加者同士が二人ずつペアとなって、たがいに質問して、相手を紹介しあうゲーム（アイスブレイク）を実施しました。一気に場がなごやかになりました。

次に岩瀬さんから文章を読んで答えるという質問がふたつ出されました。ひとつは、生活の一部に関する文章を読んで、何を表したのかを答えるというものでした。これはとても難解で正しい答えをだした方はいませんでした。また、もうひとつの質問は「市長と息子」というもので、「ある男とその息子が、盗みの疑いで逮捕された。父親のほうは、逮捕されるときに抵抗し、撃たれて病院に運ばれた。息子のほうは、手錠をかけられて交番に連れて行かれたのだが、その間、やはり激しく抵抗した。そして、交番には市長が呼ばれた。市長は交番に着いて、こう言った。・・・「ああ、私の息子が」」。出された質問は「市長と父親と息子の関係は？」というものでした。（せっかくなので答えはこの報告の最後に）

伝えるということのむずかしさ、特に日本語の難しさを私たち参加者に理解させるため、岩瀬さんからの説明は続きました。次の事例は、

「はやく泳げるように毎日練習しています」

「わたしに勝てる相手を選んでください」

というもので、どちらも「二義文」といわれ、ふたつの解釈がなりたつというものです。最初の例では「はやく」に「早く」と「速く」の漢字のどちらをいれるかで意味が違ってきますし、次の例では、自分はあまり強くないので「私が勝てる相手を探してほしい」という意味と、自分は強いので「私に挑戦してきて勝つことのできる相手を選んでほしい」という意味が発生してしまい、相反する意味をもつこととなります。メディアに関わるということのむずかしさがわかりますが、同時にボランティア活動の中でも、コミュニケーションをとる場合に本当に共有できているのか、誤解を生まない表現は何か、注意すべきことを教えていただけました。また、伝える際には相手の所に歩み寄ることも必要、という指摘もあり、つい自分たちだけがわかる専門用語を使って説明してしまうことなど、気をつけるようにとのことでした。



スポーツなどの取材は対象者がいるからこそ出来る事です。いい取材ができるためには常に誠実に対応して（取材対象となる）相手に認めてもらうことが大切になります。一方で、以前ブランメル仙台にいたドゥバイツ選手の故郷を訪ねた際には、わずかなスペースで空気が抜けたようなつぎはぎのボールを使ってサッカーを楽しんでいる子供たちの姿をみました。スポーツは平和の象徴です。そうした環境の中で生きていく子供たちがいるということ伝えることも大人の使命だと思います。ぜひ、みなさんもボランティアとしての「楽しみ」を、皆さん自身の言葉で伝えて下さい。

次に、宮城には3つのプロスポーツができて、盛り上がっているという方がいますが、一方で、私は全く逆の見方をしています。例えば、「昨日は　　の3塁打が良かった」「あのシュートはさすがだね」と、会話のきっかけがたくさん生まれて人のつながりができていることは認めるどころです。しかし、マスメディアの視点からみれば「宮城のスポーツは衰退している」と感じています。以前、プロスポーツがここまでなかった時は身近なスポーツが多く取り上げられていました。「隣の　　君が、全国大会に出る」とか宮城のスポーツボランティアの皆さんや総合型地域スポーツクラブの活動・様子なども取り上げることができました。しかし、現在は各社、記者の人数や取材できる量の問題もあって（とにかく忙しい）どうしても数字（視聴率）の取れるプロスポーツに偏り、全国ニュースでもローカルニュースでも同じような映像が流れています。地方メディアの役割とは一体なんだろうと考えさせられます。プロスポーツの中でも、プロ野球などは大型球団を除き軒並み赤字ですので、収支が合わなければ拠点を移動する可能性もあります。テレビ局からすると、アマチュアスポーツを流すと視聴率が取れないのでプロスポーツを流しているという一面はありますが、裏を返せば、視聴率が上がらないということは地域の方々も、地域の子ども達や地域に生きるスポーツ・アマチュアスポーツを軽視してる証拠であり、地域の子どもを、そして地域を育てる意識が希薄なのではないかとも感じています。「見て人は育つ」ということもあります。地域で、その人をみつけ育てるという意識が大切だとも感じています。せっかく頑張っているアマチュアスポーツがあっても知られなければ、いい指導者や選手が集まらず地域のスポーツも痩せ細ってってしまうという危機感もあります。ですので、改めて「スポーツの価値」を考える勉強会を、メディアの方々も招き、研究所で始めています。

以下、質問および意見交換

FCバルセロナではソシオ（会員）の数がスタジアムの定員をはるかに超えて増え続けています。そこで、ソシオの家族や旧会員などを除いて、新たなソシオの募集をやめようという声があがりました。表向きはスタジアムの定員以上の会員を集めたところで会場には入れないし、会員へのサービスの質の低下が起きるのではないかといいものですが、実は、例えばの話ですが、海外のソシオが増加し、クラブが乗っとられる可能性もあることを危惧しての声だったと言われていました。というのも、ソシオにはクラブ会長を決める投票権があるからです。長い時間をかけて育ててきた文化的なもの（クラブ）をどう残していくのか、考えさせられるテーマです。そこには、地域の人がクラブとどう関わっていくか、守っていくかが必要となります。

ボランティア活動も映像や文字などで残し、伝えていく必要があると思います。

（例）ある民俗博物館の歴史的価値ある厠に、説明版がなかったために、普通のトイレと勘違いし実際、用を足してしまった人がいた。

価値あるものだと共有できていないと、ただのトイレになってしまう。

（例）遺産の申請（文字資料が残っていなかったことで、ある祭の文化遺産認定が難航した）

公の機関・団体から評価を得ることで初めて人びとはそれが価値あるものだと認識する。よって、スポーツクラブに対しても、そこに関わる人びとがその価値を知り、認め、発信し、文字などで残していくことをしないとその価値は薄れていく。

スポーツ立国戦略の資料配布（今後の意見交換の材料として）

「市長と息子」の質問の答え

「市長と父親と息子の関係は？」

かけつけた市長は女性でした。つまり「父親」とは「夫婦」であり、「息子」とは「親子」ということになります。多くの参加者が市長＝男性と固定的に考えてしまい正しい答えを導くことができませんでした。こうした「固定観念」へも注意が必要ということを教えていただきました。